

ユーザーとスタッフの広場

阿部 勇氏を偲んで

阿部勇技術部次長は去る6月2日、クモ膜下出血のため永眠致しました。同氏は高エネルギー物理学研究所時代に放射光研究施設入射器部門に所属し、PFスタッフの一員として2.5GeV電子線形加速器（放射光入射器）の制御部門において活躍されました。平成9年度から高エネルギー加速器研究機構に改組されて加速器研究施設第3研究系所属になりました。

謹んで同氏のご冥福をお祈りし、追悼文を掲載させていただきます。

技術部長 三国 晃

技術部次長の阿部氏が急逝して五十七日が過ぎました。いまだに信じられません。あんなにアクティブで健康そのものに見えた彼がどうして急にみんなの前から姿を消したのだらう。

神のイタズラとしか思いようがありません。彼は朝が早く、9時には一仕事終えて、私が出勤するのを待っていたように技術部の打ち合わせを行いました。それがもう隣の部屋から声が漏れて来ることもなく、部屋の明かりが消えたままです。悔しさと寂しさが虚脱感を与えています。

彼は、東北大学で発揮された加速器に関する高い技術力を嘱望されて、昭和53年度から建設が開始された放射光実験施設の2.5GeV電子線形加速器建設に助っ人として参加されました。その建設において特に加速器の計算機制御では、従来のハードワイヤ遠隔制御からネットワークによる制御方式を採用したり、市場に出回ったばかりのCPUによる制御装置を手作りし、ROMのプログラムを書いて機器制御を行うなど進取の気風に富んだ技術力を発揮して大きな貢献をしました。これが入射器グループにとっては欠くことの出来ないスタッフになり、昭和56年9月1日に東北大学工学部より招聘されました。

その2年後に、私は東大物性研から放射光測定器へ転出してきました。彼との初対面は18年前のPF担当のKEK暑気払いだったと記憶しています。お互いによそ者同士として意気投合し、酒を片手に技官問題の議論を闘わしました。そのころの高エネ研の技術部は、待遇改善一色で組織としての意識は全くなく、大学の組織の無いところから来た者にとって、それがとても歯痒く、二人でよく愚痴を言い合いました。それが変わり始めたのが、私が部長になってからで、徐々に組織の形が見えてきたように記憶しています。これには彼の協力が絶大でした。

平成9年に高エネ研が機構への組織替えを機に技術部に次長ポストが整備されて2年後、2代目次長を彼にお願

いしました。あの頃の彼は技術者として特別に輝いていました。若い技術者を引っ張り、刺激と夢を与えてくれました。

その一つが「PCaPAC」(Personal Computers and Particle Accelerator Controls)の国際会議を日本で開催したことです。更にPCを応用した制御技術開発のために応募した科学技術振興調整費が認められた事です。この時の喜び様は尋常ではありませんでした。よく二人で祝杯をあげ、これから先の夢と見通しを熱っぽく語り合いました。技術分野の違いはあっても心意気はよく理解出来ました。そして彼はCOACKという「次世代型計測制御汎用カーネル」システムを完成に導きました。その有効性を小菅 隆君は「PFビームライン・インターロックシステムとその集中管理システムの開発」において証明し、第一回KEK技術賞を受賞しました。

彼はその気になれば博士の称号もとれたのに、私の命令を笑ってごまかしました。

国立大学等の法人化に関しても、共同利用機関の技術職員における法人化検討会と一緒に立ち上げ、各機関の部長・課長を始めとして技術職員間の風通しを良くしました。

今年になって私は彼にお願いしました。10年も部長をしていて、もうくたびれたから定年までのんびりさせてもらうよ“後は阿部君頼んだよ”と約束したばかりだったのに、何で黙って行ってしまったんだらう？、真面目で冗談が好きで、明るく誰とでも気楽に飲み、語り、面倒見の良かった彼がもうこの世にいない、とにかく残念、無念の一言です。

でも彼はもっと無念に思っているだらうな。やり残したことが沢山あるから…。

その無念さに応えるために、彼が育てた仲間とともに彼の築いた成果を引き継ぎ、普及させて更なる飛躍の努力をする事が彼への何よりの供養と信じたいと思います。

阿部 勇さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

技術部加速器第二課長 竹中たてる

阿部さんが入所したとき、私はすでにPSで10年間も過ごしていた。当初、彼とは技官問題、技術部に対する考えの相違がかなり隔たっており、もともと接点も少なく、仕事の上でも話す必要に迫られることもなかった。ところが、ある研究会の帰り、彼のほうから空港で声をかけてきたのが身近に話した最初ではないだらうか。

技術部で班長が導入されたときの同期でもある。そのときから技術部では部課班長連絡会の開催を始めたが、彼とは考え方の相違から、数年反目しており、私が研修、研究会関係の担当を行う頃から、一部、彼との融合が始まった。

彼は人事・評価に関する考えなど非常にすっきりしており、時代を先取りする考えを持ち込み、いかに公平な評価を行うかなど散々議論をした。決して無理強いして押し

付けや、ねじ込むようなやり方はせず、じっくりと時間をかけ議論を大事にした。政治の盲点、矛盾、人々・自分たちの人生観などの話もとことんした。また、それが非常に楽しかった。彼の実直な一面を見た感じで、いつの間にか常に議論をするような間柄になっていた。その後、議論するだけでなく一致した点においては協力して実行が伴うようにもなっていた。

技術者と研究者との関係とはどのようなものか、法人問題では数年議論を積み重ね部長答申への内容も大事にするスタンスは外さなかった。今後の技術者像を得るため、大学に出かけて聴講したり、つくば市の農林省機関に出向いたり、情報収集に我々は汗を流した。

仙台に行ったとき昼食に天麩羅・刺身のおいしい小さな店に案内してもらい「私は野菜だけでも1週間は大丈夫だな、君は肉がないと1週間我慢できないな」など話をし、夕方に牛タンを堪能したのはつい2ヶ月前のことである。また、時には部長とも酒を酌み交しよく部長に切り込んだし、反論も相当した。彼は時代先取りの積極性と頭の回転の良さもあるが、心の広い豊かな人間性を備えており、私は彼という人物に安堵感を得ていた。

法人化に対する技術部案を早急にとりまとめ、技術者の不毛地帯をいかに食い止め、共同利用研・大学へどう発信するか、そのことで6月7日の共同利用機関技術職員法人化検討会での緊急会議を決定した。そして、開催5日前に突然の訃報である。“竹中さん緊急連絡があるので至急連絡ください”三国部長の伝言が2日の午後2時過ぎに入った。彼は2時間ほど前、既に亡くなっていたのである。告別式の6日は阿武隈川沿いの山あいでは茶毘に伏した青空のもと、私は無念さと悔しさを交差させながら静かに空白の時を過ごした。

次の日は彼の決定した7日の会議を滞りなく開催し、意思を引き継いだ。

法人化が差し迫る大事な時期にかけがえのない人物を亡くしたことは返す返すも残念である。百か日法要には彼の眠る墓前に最近の技術部報告をするために福島へ向うつもりである。

阿部 勇氏の冥福を心よりお祈りします。

将来の研究者のために

放射光源研究系 春日俊夫

放射光研究施設は、将来の研究者の若い芽を育てるお手伝いとして、多くの生徒さん・学生さんの施設見学をお引き受けしています。この度、岩手県立盛岡一高の申し込みを受け、同校生徒さんたちの研修旅行に協力致しました。

同校数科一年生は2泊3日の研修旅行としてつくば学園都市内の幾つかの研究機関や筑波大学を訪問しています。高エネルギー加速器研究機構もこれに協力し、7年前から1日間の見学・実習を引き受けています(庶務課企画係対

応、今年の実入側の責任者は加速器研究施設の吉岡教授)。私も放射光源研究系の何人かに声を掛け、昨年からの協力をしています。例年は、生徒さん方に4班に分かれていただき、おのおのの班に個別の簡単な実験を行っていただき、最後に報告会を持つというものでした。今年は、7月12日に行われ、加速器が例年より早めに夏期停止に入ったという事情を生かし、これまで果たせなかった加速器の見学を主体としたプログラムとなりました。10名ずつのA-Dの4班に分かれていただき、A班はBファクトリー(加速器、BELLE)、B班は電子・陽電子リニアック、C班はPF加速器と実験ホール、D班はATFを見学していただきました。

私はC班対応者として、放射光源研究系の帯名さん、土屋さんと物質科学第一研究系の兵藤さんに協力を依頼しました。前もって四人で集まり、以下のような話し合いを持ちました。

- ・放射光の発生装置(電子蓄積リング)
- ・挿入光源
- ・ビームラインと実験装置

の説明をすると共に実物を見学していただき、その働きを出来る限り理解いただく。質問には(高校一年生にも理解できる範囲で)出来る限り正確な回答を行う。最終的には一人でも多く"Science"に興味のある人が出てくることを望む。

当日は8時30分頃からセミナーホールで、機構の説明、放射線と安全に関する講習が行われました。C班は9時30分頃放射光研究施設に移動し、昼食をささみ14時30分頃まで説明・見学が行われました。14時30分頃から約1時間レポート作成、15時30分から約1時間、全班がセミナーホールに集合して各班の報告、質疑応答が行われました。生徒さんは皆熱心な方々で、説明・見学時には多くの鋭い質問をされました。それに対し、講師の4人はまじめに回答を行ったつもりです。ただし、最後の報告会を聞いてみると、若干消化不良を起こしている印象でした。メニューを再検討しなければならないかもしれません。移動中のバスの中で、一人の生徒さんがこのような研究所で働きたいと示唆され、大変感激いたしました。

報告会時に、同校同窓の物質科学第二研究系の宇佐美さんに後輩を励ます話をお願いしました。直前のお願いにもかかわらず快く引き受けてくださり有り難うございました。また、御協力を頂いた帯名さん、土屋さん、兵藤さんにお礼を申し上げます。

